

「教学と現代9」（海外伝道特別講座）報告：第3回

ハワイ伝道庁長・浜田道仁氏 講演要旨

ハワイ伝道の歴史と現況

ハワイにはすでに戦前の早い時期から多くの日系人が移住しており、天理教の教会も数多く設置されていた。ハワイはアメリカ合衆国の50番目の州で、1934（昭和9年）にアメリカ伝道庁が設置された際には、ハワイにある8カ所の教会はアメリカ伝道庁ハワイ支部として管轄された。

アメリカ伝道庁とは独立したハワイ伝道庁が設置されたのは戦後の1954年（同29年）である。翌年には子弟の信仰育成のために「サンデースクール」が開校、1965年（同40年）に伝道庁神殿落成、1970年（同45年）にハワイ一れつ会発足など、伝道庁として着実に足固めを進めた。その結果、1974年（同49年）にはハワイ青年大会を盛大に開催し、その総参加者数は12,800人にも上った。その後も伝道庁内の天理文化センターに新しく柔道場を設置したり、「天理文庫」を開設したり設備を拡充。2014年（平成26年）には伝道庁創立60周年を迎えることになる。

浜田道仁氏は2001年に7代目の庁長として就任した。現在、ハワイ伝道庁管内の教会数は34カ所、布教所数は39カ所ある。このうち、戦前の設立は21カ所、戦後は19カ所。その内、戦前の教会2カ所は教会本部に名称をお返し、1カ所はアメリカ本土に、3カ所は日本に移転している。世代交代が大きな課題であり、基本的に個人主義的な社会風土の中で、信仰をどう次代に伝えて行くかが課題である。また対外的にはキリスト教社会ともいえるハワイの中で、「においがけ」（布教伝道）をどう進めて行くか、その方法について模索中である。

自分の目で見たハワイ社会

浜田氏は、庁長就任前に7年間、コンゴで教務を務めた経験を持つ。赴任当初は、内戦で混乱したコンゴに比べて、ハワイは平和で天国のように感じたという。ただ、次第に現状を知ることにつれて、ハワイの経済状況の厳しさを知ることになった。

ハワイは観光産業で持っている島であるが、それだけに国際紛争などがあるとその打撃は大きく、暮らしも外から見ると楽ではない。2001年9月11日の同時多発テロの後のように、観光客の客足がすっかり遠のいてしまった時期もある。しかしその後は徐々に盛り返して、2012年には過去最高の780万人にも上った。そのうち、120万人が日本人である。しかし、経済状況は不安定で厳しいことには変わらない。

州政府の財政難のため、伝道庁前の幹線道路はなかなか補修されず、フリーウェイもあちこち穴だらけである。公立学校もまた、人件費削減のあおりを受けて月に何度か金曜日が休みになった。観光以外に特筆すべき産業がないため、就職難が続き、アメリカ本土に仕事を求めに行く人も少なくない。ホームレスも増えている。高校生の多くが将来の夢を描けない状況だという。

かつては日系移民の割合が大きかった。しかし、近年はフィリピンの移民も増えてきて、移民社会の状況も様変わりしつつある。社会状況は基本的にアメリカ本土と同じである。言語の

問題は大きく、日系二世、三世の間で世代間コミュニケーションの問題も生じてきている。浜田氏は、自分自身が英語をうまく操れないことをもどかしく感じるという。

しかし、そんな中であっても、少しずつ天理教の存在感を出せるようになってきた。近年、天理柔道や天理文庫の会員が増加し、50年続く年1回のバザーはハワイでも有数の規模となっている。最近では、毎月1回ハイウェイの公共的清掃ボランティアを天理教でできるようになったことなどはその例である。TENRI-KYO という名称が大きな看板に表示され、周辺住民へのにおいがけになっている。

天理教のハワイ伝道の展望

2011年5月末、ホノルル市で伝道庁主催・海外部後援の「天理教ハワイコンベンション（大会）2011」が開催された。ハワイ・アメリカ・日本・カナダ・香港・オーストラリア・イギリス・フランスから320名が参加。30代が最も多く、若い世代の教友の参加が目立った。このコンベンションに刺激を受け、ハワイでも以前はそれほど熱心でなかった教友が信仰に目覚め、教会へ足を運ぶ人が増えたという。

その一方で、ふだんの生活では、「信仰は一人ひとりのものだから」と親子間で積極的なつながりをしない信者家庭が多いという。自然、信仰への思いが薄れていく現状にある。これはアメリカ的な個人主義の表れでもあると思うが、日本でも同じ傾向だろう。しかも若者は経済的にも余裕がない。日本に比べ近い大学の学費であり、それを借金して大学へ通い、その返済のためアルバイトに忙殺されている。

ハワイは人口の半分が無信仰であるが、信仰者の大半はキリスト教である。しかし、世界のさまざまな紛争が、キリスト教の聖典から起きているという側面は否定できない。争いの元は、お互いが他人と思うからであって、世界いちゃれつ兄弟姉妹と思えば、人々はもっと助け合い社会を築けるはずだ。そのために親神様の教えが人々に求められなければならない。このキリスト教社会にあって、楔を打ち込みたいと浜田氏は主張した。

浜田氏は庁長就任の直後から、「One World, One Family:TENRIKYO」と記した、車に貼るマグネット製ステッカーを作成し、ハワイの教友に配布してきた。また2012年12月からは週に1度、ハワイで最も繁華なワイキキで神名流しとゴミ拾いの活動を始めた。そうした活動には若い夫婦や教会長が参加し、独自に始めるようになった教友もいるという。

おやさと研究所、また海外部に対しては、日常の信仰にエネルギーを補給する教理書・実践教理書の英訳本を増やしてほしいという要望が述べられた。そうすることで、英語圏伝道における信仰の日常化の大きなバックアップになるのである。

（文責・金子 昭）



浜田道仁伝道庁長